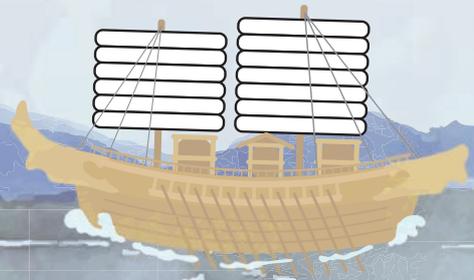
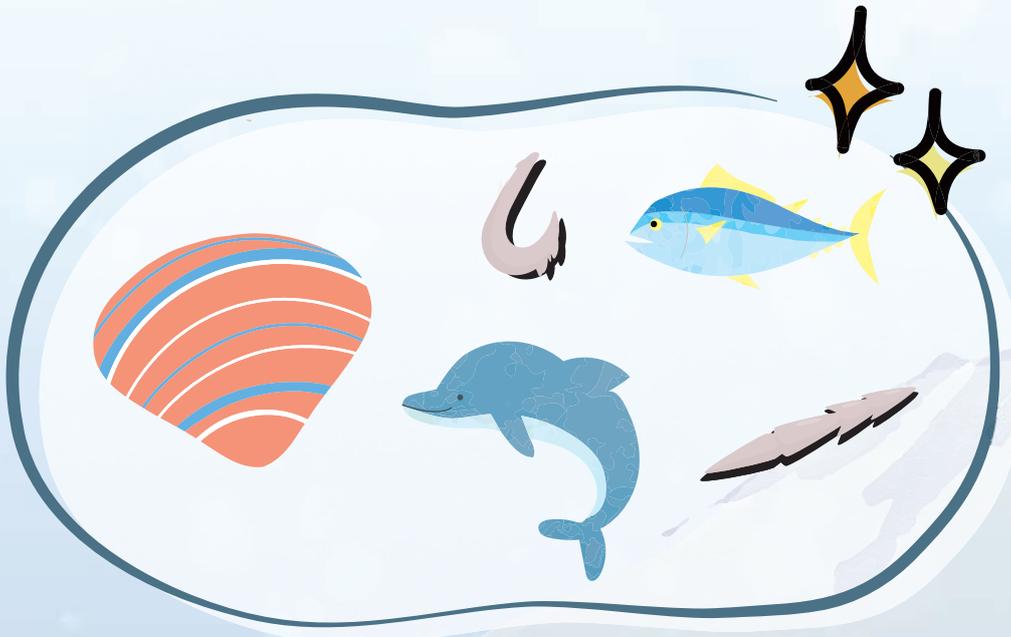


令和6年度 考古学セミナー

海から探る、

いにしえのかながわ

10月19日 / 10月26日 / 11月2日  
かながわ県民センター ホール



# 講師紹介

## ◆海部 陽介(かいふ ようすけ) 東京大学総合研究博物館 教授

(専門/研究テーマ) 人類進化学(旧石器時代)/ アジアにおける人類の進化と拡散史の研究

(著書・論文等)

2005『人類がたどってきた道 “文化の多様化”の起源を探る』NHK出版、2016『日本人はどこから来たのか』文藝春秋、2017『我々はなぜ我々だけなのか アジアから消えた多様な「人類」たち』講談社、2020『サピエンス日本上陸 3万年前の大航海』講談社

## ◆杉山 浩平(すぎやま こうへい) 東京大学 総合文化研究科 グローバル地域研究機構 特任研究員

(専門/研究テーマ) 日本考古学 (弥生時代)/ 弥生文化や列島の気候変動、災害に関する研究。

(著書・論文等)

2014『熊谷市前中西遺跡を語る』六一書房、2015『列島東部における弥生後期の変革』六一書房、2018『弥生時代食の多角的研究 池子遺跡を科学する』六一書房、2019『再考「弥生時代」―農耕・海・集落―』雄山閣、2020『富士山噴火の考古学 火山と人類の共生史』吉川弘文館

## ◆日高 慎(ひだか しん) 東京学芸大学 教育学部 広域自然科学講座 文化財科学分野 教授

(専門/研究テーマ) 日本考古学 (古墳時代)・文化財科学/ 古墳時代の葬送儀礼についてや船の構造、埴輪などに関する研究を行う。

(著書・論文等)

2022「埴輪に象られた家畜」『家畜の考古学 古代アジアの東西交流』雄山閣、2022「古墳時代に構造船はあったのか」『人・墓・社会- 日本考古学から東アジア考古学へ-』雄山閣、2024「2.古墳時代の女性被葬者と女性埴輪」『深化する歴史学 史資料からよみとく新たな歴史像』大月書店、2024「『東京人類学会雑誌』掲載の人物埴輪」『古代学と遺跡学- 坂靖さん追悼論文集-』坂靖さん追悼論文集刊行会、2024『古墳時代の交通と流通(考古調査ハンドブック25)』 ニューサイエンス社

## ◆池田 榮史(いけだ よしふみ) 國學院大學 研究開発推進機構 教授

(専門/研究テーマ) 日本考古学 (中世)・水中考古学・博物館学/ 水中考古学による蒙古襲来の解明、アジア史における琉球列島文化の位置付けに関する研究。

(著書・論文等)

2008『古代・中世の境界領域―キカイガシマの世界―』高志書院、2009『中世東アジアの周縁世界』同成社、2010『沖縄陸軍病院南風原壕』高文研、2014『ぶらりあるき沖縄・奄美の博物館』芙蓉書房、2015『琉球史を問い直す』叢書・文化学の越境』23』森話社、2018『海底に眠る蒙古襲来―水中考古学の挑戦―』、2019『ぶらりあるき釜山・慶州の博物館』芙蓉書房、2019『沖縄戦の発掘―沖縄陸軍病院南風原壕群(シリーズ「遺跡を学ぶ」137)』、2021『元軍船の発見―鷹島海底遺跡(シリーズ「遺跡を学ぶ」150)』新泉社

## ◆阿部 芳郎(あべ よしろう) 明治大学 文学部 教授

(専門/研究テーマ) 日本考古学 (縄文時代)/ 縄文時代の社会構造と生業に関する研究。

(著書・論文等)

2001『日本人はるかな旅』日本放送出版協会、2003『縄文社会を探る』学生社、2002『縄文のくらしを掘る』岩波書店、2004『失われた史前学』岩波書店、2012『土偶と縄文社会』雄山閣、2012『人類史と時間情報～「過去」の形成過程と先史考古学～』雄山閣、2014『水産資源の利用形態と生業活動』同成社、2017『縄文社会をどう考えるべきか』雄山閣、2018『余山貝塚の生業活動』雄山閣、2018『製塩活動の展開と霞ヶ浦の地域社会』雄山閣、2023『縄文時代後晩期の漆器と容器間関係』雄山閣

令和6年度 考古学ゼミナール

# 海から探る、いにしえのかながわ

• 日 程 (各講の後に質疑・休憩)

10月19日(土)

13:00 ~ 13:05 開講式

13:05 ~ 14:35 第1講

15:00 ~ 16:30 第2講

11月2日(土)

14:00 ~ 16:00 第5講

16:15 ~ 16:30 修了式

10月26日(土)

13:00 ~ 14:30 第3講

15:00 ~ 16:30 第4講

• 会 場 かながわ県民センター 2階ホール  
(横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2)

---

## 要旨集 目次

- ◆ 第1講 ◆ 「海を越えた最初の日本列島人 - 実験航海で探る3万年前の挑戦 -」 . . . . . 1  
東京大学総合研究博物館 教授 海部 陽介
- ◆ 第2講 ◆ 「弥生人、黒潮 270km の航海」 . . . . . 5  
東京大学総合文化研究科 グローバル地域研究機構 特任研究員 杉山 浩平
- ◆ 第3講 ◆ 「海上・水上交通と海浜型前方後円墳・洞穴遺跡」 . . . . . 9  
東京学芸大学 教育学部 広域自然科学講座 文化財科学分野 教授 日高 慎
- ◆ 第4講 ◆ 「モンゴル襲来と鎌倉幕府」 . . . . . 21  
國學院大學 研究開発推進機構 教授 池田 榮史
- ◆ 第5講 ◆ 「縄文の海となりわい」 . . . . . 26  
明治大学 文学部 教授 阿部 芳郎

# 海を越えた最初の日本列島人

## — 実験航海で探る 3 万年前の挑戦 —

東京大学総合研究博物館 教授 海部 陽介

### はじめに

日本列島の人類史は、旧石器時代の男女の集団が、困難な海を越えて島へたどり着くという壮大なドラマではじまりました。その大航海の実態をさぐったのが、「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト（2016 - 2019）」。

数々の失敗を乗り越え、最後に丸木舟での台湾から与那国島への航海に成功したこのプロジェクトからわかったことをお話します。

### 1 縄文の生業と海

化石人骨や遺伝学の研究から、私たちホモ・サピエンスは、30万～10万年前のアフリカで進化したことがわかっています。ホモ・サピエンスは、後期旧石器時代（約5万～1万年前）にアジア、オーストラリア、ヨーロッパ、そしてアメリカ大陸へと急速に拡散しました（図1）。やがてその移住の波が日本列島に及びますが、神奈川県に伊豆諸島・神津島産の黒耀石が搬入されており、列島へ渡ってきたのは何らかの航海能力を持つ集団であったことがわかります。

そして列島への渡来ルートの一つとして注目されるのが「沖縄ルート」です（図2）。沖縄ルートは当時大陸と陸続きだった台湾から琉球列島へ渡る経路のことで、朝鮮半島から九州へ渡る「対馬ルート」（約3万8000年前）に続いて、ここでの渡来が起こったようです。このような沖縄ルートを想定する根拠は、沖縄島以南の遺跡から見つかる考古遺物が、九州や本州のものと大きく

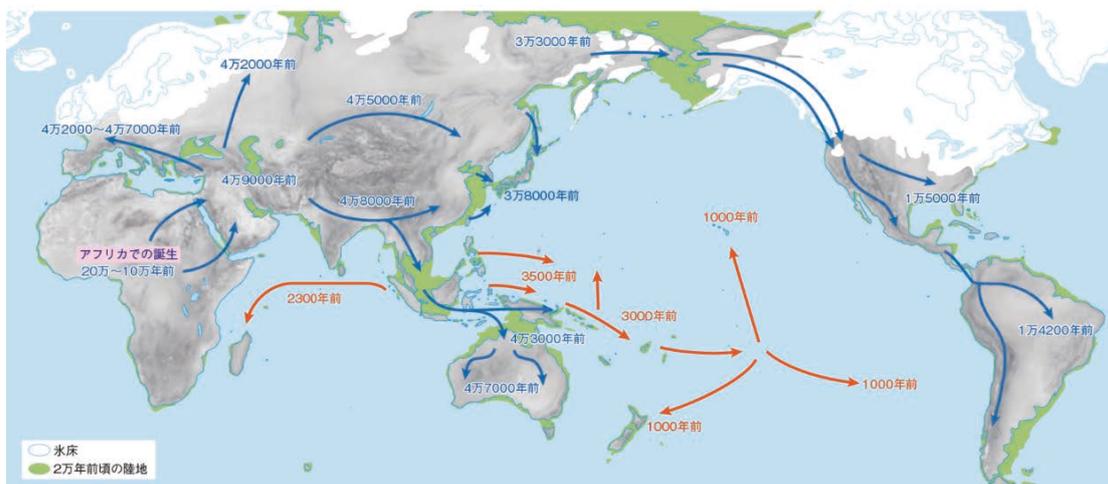


図1. ホモ・サピエンスの世界拡散（海部 2020）



図2. 日本列島への3つの渡来ルート。現在は海だが4万～3万年前の渡来時に陸化していた領域は、濃いグレーで示してある。

異なる一方、インドネシアの遺跡から報告されている遺物と共通点があること、沖縄島などから見つかる港川人などの化石人骨の形態に南方的要素が認められること、暫定的結果ながら一部の化石人骨から採取されたミトコンドリアDNAがやはり南方的要素を示すことがあげられます。

ただし沖縄ルートは対馬ルートに比べれば移住集団の規模は小さく、さらに北琉球の種子島へやってきたのはおそらく対馬ルートから九州へ入ってきた集団であり、琉球列島全域が台湾経由で植民されたわけでもなさそうです。それでもこのルートが注目されるのは、琉球列島への移住が、当時の世界において最も困難な航海の末に達成されたと考えられるからです。

## 2 渡海の難易度

世界へ広がったホモ・サピエンスは、5万年前頃から、オーストラリアやニューギニア、フィリピンなど、海の向こうにある島や陸塊へ到達しました（図1）。3万8000年前以降にはじまる日本列島への渡来は、こうした西太平洋海域における人類最古段階の本格的海洋進出の一局面ととらえられますが、それは難易度という観点からたいへん興味深いものです。特に琉球列島の海域には、秒速1～2メートルで流れる世界最大規模の海流「黒潮」が流れ込み、隣の島が見えないほど広い海峡があります（図3）。

特に渡るのが困難なのは、黒潮本流が流れ込む種子島と奄美大島間のトカラ列島の海、当時も230キロメートル以上の距離があって目標の島を目視できなかった（地球が丸いため）沖縄島－宮古島間の海峡、黒潮本流が流れかつ目標の島が見えない台湾から与那国島への海峡の3つでしょう。これらの海峡の全てを渡らずとも琉球列島の遺跡分布を説明できますが、少なくとも2つは越える必要があり、実際に3つを越えた可能性も十分にあります。

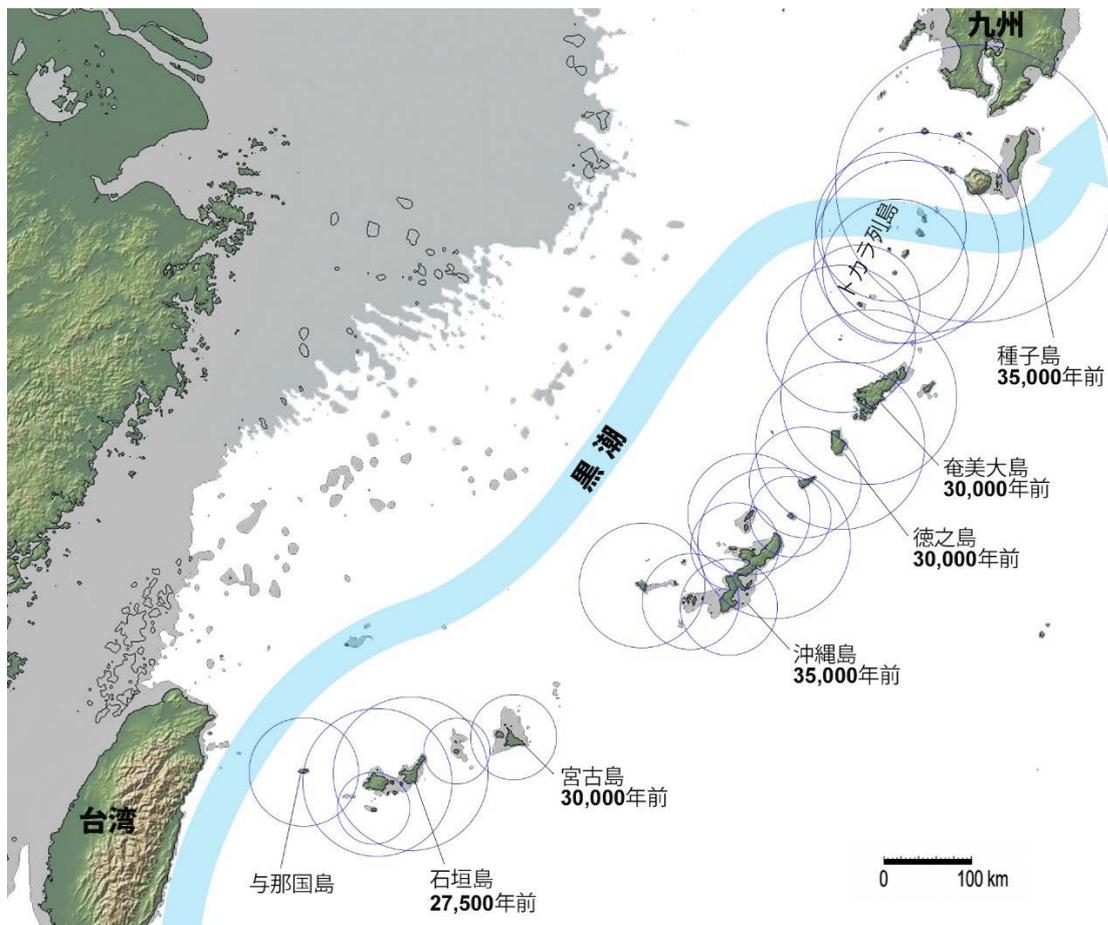


図3. 3万数千年前の琉球列島と各島における最古の遺跡のおおよその年代。海面を80m下げて陸化する部分をグレーで示してある。円は海上から島が見える範囲。黒潮の流路は推定される3万5000年前のもの (Kaifu 2022 より改編)。

### 3 渡海の実態を探るプロジェクト

旧石器人は、当時の技術でどのように琉球の海を越えたのでしょうか？ それはどれだけ困難な挑戦で、彼ら彼女らは、なぜそのような挑戦を決意したのでしょうか？ こうした謎に迫るため、私は前職の国立科学博物館において「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト (2016 - 2019)」を企画・実行しました (図4)。それは学術的根拠をもとに当時の舟を推定して復元し、自分たちで実際に航海を行い、祖先たちの海への挑戦を再現して理解しようとするものでした。2013年からの準備を経て2016年より正式に開始し、数々の実験を行った本プロジェクトが、2019年7月の丸木舟による台湾→与那国島への航海成功により完結したので、ここではその模様を紹介します。



図4. プロジェクトタイトル

<引用参考文献>

◆書籍

海部陽介 『サピエンス日本上陸 3万年前の大航海』 講談社 2020

海部陽介 『人間らしさとは何か』 河出新書 2022

◆ウェブサイト

プロジェクト公式サイト：<https://www.kahaku.go.jp/research/activities/special/koukai/>

◆記録映画

『スギメ』（Amazon プライム・ビデオ、U-NEXT 等で配信中）

<https://www.kahaku.go.jp/sugime/>

◆主な論文

Kaifu, Y., 2022. A synthetic model of Palaeolithic seafaring in the Ryukyu Islands, southwestern Japan. *World Archaeology* DOI: 10.1080/00438243.2022.2121317. (無料ダウンロード可)

Kaifu, Y., Kuo, T.-H., Kubota, Y., Jan, S. 2020. Palaeolithic voyage for invisible islands beyond the horizon. *Sci. Rep.* 10, 19785. <https://doi.org/10.1038/s41598-020-76831-7>. (無料ダウンロード可)

Kaifu, Y., Lin, C.-H., Goto, A., Ikeya, N., Yamada, Y., Chiang, W.-C., Fujita, F., Hara, K., Hawira, T., Huang, K.-E., Huang, C.-H., Kubota, Y., Liu, C.-H., Miura, K., Miyazawa, Y., Monden, O., Muramatsu, M., Sung, Y., Suzuki, K., Tanaka, N., Tsang, C.-H., Uchida, S., Wen, P.-L. 2019. Palaeolithic seafaring in East Asia: An experimental test of the bamboo raft hypothesis. *Antiquity* 93:1424–144. (無料ダウンロード可)

## 弥生人、黒潮 270km の航海

東京大学 総合文化研究科 グローバル地域研究機構 特任研究員 杉山 浩平

弥生時代は水田稲作を始めた。神奈川の地では前期後半（紀元前5～4世紀ごろ）と中期中葉（紀元前2世紀ごろ）に大きな変化が生じた。前期はコメの伝播であり、中期は新たな道具や生活スタイルが伝わってきた。それらはどのように伝わってきたのだろうか。演者は海を通じて東海地方（伊勢湾西岸）から伝わったと考えている。コメを入れた土器や新たな道具を船に載せて、黒潮の流れとともに。

### 1 新しい船の登場

丸木舟 → 準構造船（弥生・古墳）

丸木舟をベースにして舷側板などをつけて大きくしたもの（図1）

滋賀県赤野井浜遺跡（弥生時代中期前半）

鹿児島県中津野遺跡（南さつま市）（弥生時代前期後半）最古の準構造船の部材）

弥生時代の関東地方での出土例はない

土器・板に描かれる船 → 船団 → 運搬量の増加のため（図2）

袴狭遺跡（兵庫県豊岡市）15隻 青谷上寺地遺跡（鳥取県鳥取市）6隻

船を操る人々

愛知県田原市保美貝塚（縄文時代後期）の海人：上腕の骨の発達

航海による物流

長崎県域（西北九州型）弥生人：形質的に縄文的・核DNAでは弥生的

南島からのゴホウラ・オオツタノハなどの交易「貝の道」

### 2 関東地方へ水田稲作文化を伝えた航海者

神奈川県下の弥生時代前期のコメ資料

大井町中屋敷で炭化米、宮ヶ瀬 上村遺跡などでコメの圧痕（図3）

水田や石庖丁などの検出・出土例はない

北部九州で出土した弥生時代前期の土器（遠賀川式土器）→伊勢湾沿岸まで分布

稲作の広がりを示す：壺・甕・蓋・鉢から構成される。

伊勢湾以東に分布する遠賀川式土器の系統にある土器：遠賀川系土器（図3右・図4）

伊豆諸島と神奈川県西部に多く分布する：壺以外は極めて少ない→土器の中身が重要  
神津島産黒曜石を巡る伊豆諸島と神奈川県西部との交流  
縄文時代後期から弥生時代中期前半に神津島の砂糠崎の黒曜石が限定的に流通  
遠賀川系土器の分布と一致  
海を介した弥生時代前期の東海地方との交流→農耕の伝播（図5）

### 3 弥生時代中期中葉 足柄平野の弥生ムラ

弥生時代中期の集落：中里遺跡（図6左）

竪穴住居址 102 軒、掘立柱建物址 73 棟、井戸址 6 基、土坑 882 基、方形周溝墓 46 基  
近畿地方の土器 広口の壺が目立つが、壺・甕・高坏など多様→前期との違い  
伊勢湾沿岸の地域の土器・模倣された土器（図6右）  
集落の形成は海に関わる集団によるもの？（図6左）

中期中葉の東西交流

関東地方へ運ばれる近畿地方・東海地方西部の土器  
関東地方へ運ばれる近畿地方・東海地方西部の石器

難所を超える航海

潮岬や遠州灘など近世でも航海の難所と呼ばれるところを超える知識と技術を持つ集団による航海と物資の輸送・技術の伝播（図7）

#### まとめ

弥生時代において、農耕民とは異なり、海洋資源などの獲得とその加工・流通に従事した人々がいた。そうした人々を海人集団と呼びたい。かれらは沿岸漁撈に従事するだけでなく、時に沖合・遠方まで出かけ、黒物資の獲得や流通に従事していたのであろう。それを可能とする技術・体力・経験知を伝統的に有していた。そうした人々は弥生の農耕社会のなかで、生産物資を流通・交換することで、コメなどの食糧を得ていたと考えられる。こうした人々を介して物資が流通し、技術が伝播し新たな社会が形成されたのである。その姿を顕著に見ることができるのが「いにしえ 弥生時代前半期の神奈川」である。

#### 引用・参考文献

杉山浩平 2014 『弥生文化と海人』 六一書房

杉山浩平 2019 「「海」から見る東日本の弥生文化」『再考「弥生時代」』 浜田晋介・中山誠二・杉山浩平 雄山閣

杉山浩平 2022 「関東地方弥生社会の形成と太平洋沿岸の海人」長友朋子・深澤芳樹・石川日出志編 『東方の弥生文化』

吉川弘文館



図 1 弥生時代の準構造船の復元（老崎市博物館）と神奈川県横須賀出土の土製品（古墳時代？）

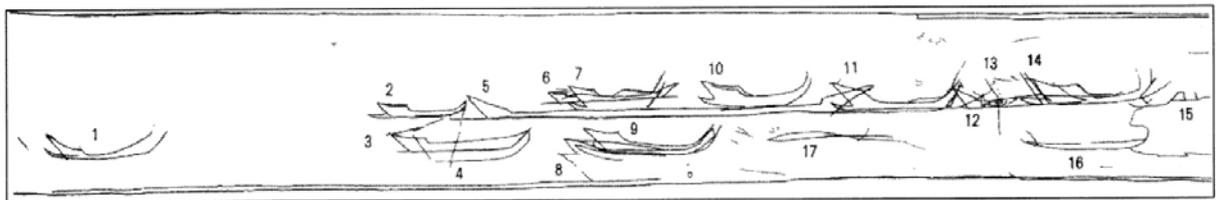


図 2 兵庫県袴狭（はかざ）遺跡出土の船が描かれた板（弥生後期～古墳前期）（兵庫県教委 2000）

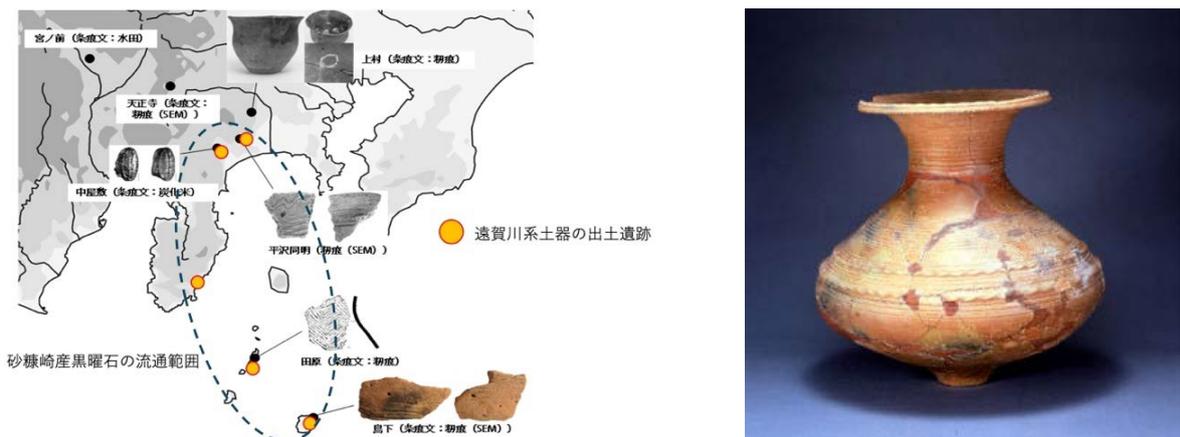


図 3 南関東地方の弥生時代前期のコメと平沢同明遺跡出土の遠賀川系土器（秦野市HP）

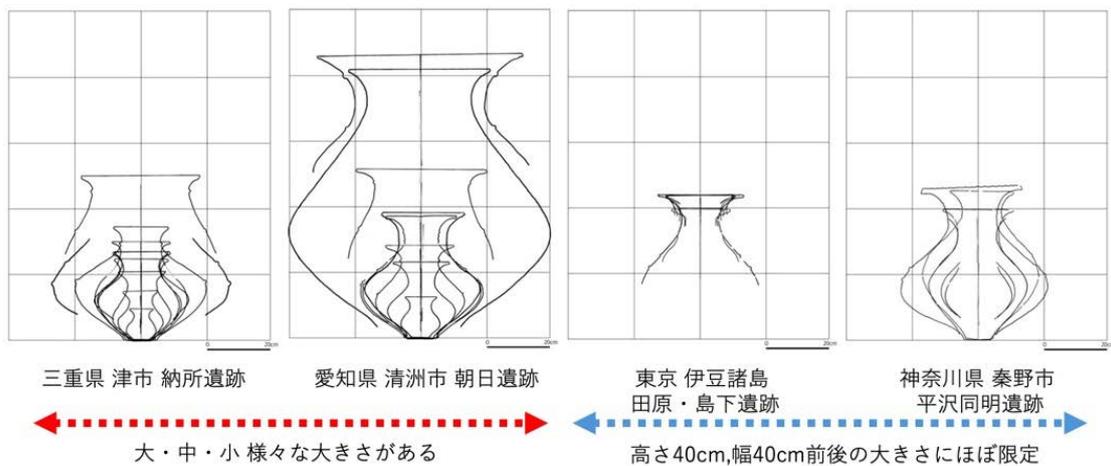


図 4 伊勢湾沿岸と伊豆諸島・神奈川の遠賀川系土器の大きさの比較

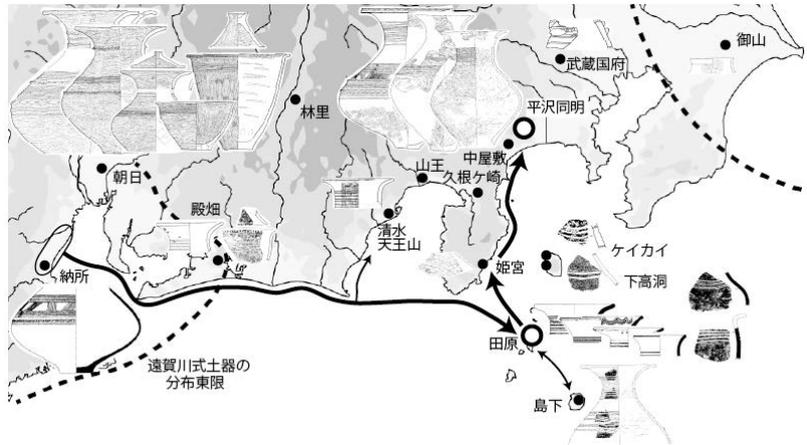


図5 神奈川へのコメの伝播の想定ルート (杉山2019)



図6 小田原市中里遺跡の遺構 (杉山2022) と弥生土器 (小田原市2021)

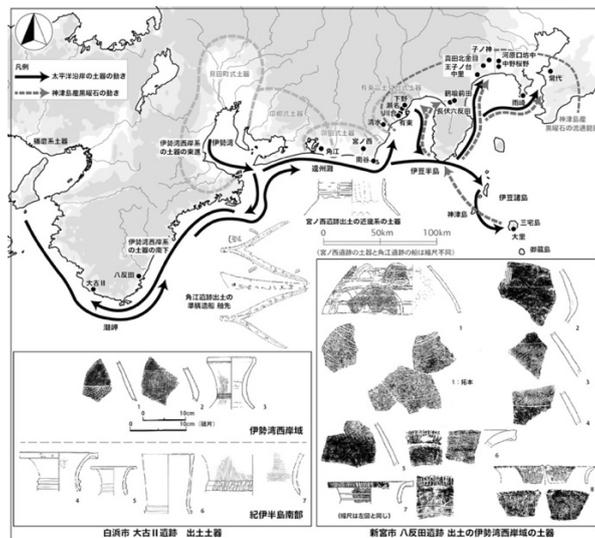


図7 弥生時代中期中葉の東西交流 (杉山 2022)

## 海上・水上交通と海浜型前方後円墳・洞穴遺跡

東京学芸大学 教育学部 広域自然科学講座 文化財科学分野 教授 日高 慎

### はじめに

海や河川に面した場所で築造された古墳があることは周知の事実である。もっとも典型的かつ古くから知られていたものとしては、瀬戸内海に面した兵庫県神戸市五色塚古墳・西求女塚古墳などの大型の前方後円墳・前方後方墳であろう。海から古墳を望んだ時に、葺石で覆われた古墳姿は日の光で輝いて見えていたはずである。少ない平野部のほど近くで築かれた大型古墳は、奈良盆地の大型古墳とは異なる築造の基盤があったように思われてくるのである。私の発表では、古墳時代の海上・水上交通のあり様をみていきながら、前方後円墳の築造の背景を考えていきたい。また、海蝕洞穴への埋葬が顕著に認められる三浦半島や房総半島などの実態も視野に入れて、高塚古墳とは異なる埋葬形態のもつ意味についても考えていきたい。

### 1. 海上・水上交通の具体像

私は、太平洋沿岸地域や日本海沿岸地域にみられる特徴的な遺物をめぐって、内陸の古墳の被葬者とは異なる性質があることを論じたことがある。短冊形鉄斧、5世紀代の須恵器、衝角付甕や壺罎などが沿岸地域のみならず、東北北部における北上川や最上川の流域で分布することを示した。また、北海道においても島嶼部や沿岸地域を中心に馬具、刀剣、刀子、石製模造品など特徴的な資料が出土している。その分布をみると、古墳時代文化の文物は海岸沿いに持ち込まれていた可能性が極めて高い。それは、藤本強が述べた「北の文化」あるいは「北のボカシの領域」に相当し、「中の文化」すなわち古墳時代文化からみれば前線地帯にあたることを考えたのである（日高2001）。

私は、川喜田二郎が示した水界民の概念を応用するとともに、港や津を統括する首長の存在を示した。水界民とは、川喜田二郎が列島の稲作について、海岸沿いのみならず河川や湖など、総体として「水界稲作民」であるという位置付けをおこない、古墳や神社の立地は、内陸水運も含めて「ターミナル・ステーション」の付近が選ばれたと述べたことに基づいており（川喜田1980）、漁撈、水運のすべてを包括した概念といえる。常陸において出土している巴形銅器や初期の滑石製模造品、骨鏃や金銅製品、列島に類例のない獅噛環頭が八戸市で出土していること、いわき市中田装飾横穴から出土している副葬品は100m級の前方後円墳の副葬品でもおかしくないものが出土していることなどを指摘した。そして、いわき市荒田目条里遺跡出土の「郡符 立屋津長伴マ福磨 可口召…」木簡の存在から「津長」つまり水界民と港を統括する首長が古墳時代にも存在するということを想定したのである（日高2002）。

## 2. 海浜型前方後円墳とは

海浜型前方後円墳とは、文字通り海浜部に近いところに築造された前方後円墳のことである。もちろん、前方後方墳や円墳、方墳なども含む。2013年11月16日に公益財団法人かながわ考古学財団が主催した「海浜型前方後円墳の時代」というシンポジウムで議論され、私もそこで「事例3香取海—内海世界の古墳—」という発表をした(日高2015)。その後、2015年には同名の書籍も刊行されている(かながわ考古学財団2015)。

内陸部にある古墳も、もちろん存在する。埼玉や群馬、栃木など海に面していない地域にも大きな古墳は存在しているし、それらは後世の律令国家による幹線道路である東山道の近くで大型の古墳が築造されているように見える場合もある。長野県の善光寺平や伊那谷、山梨県の甲府盆地などにも大型の古墳が築造されている。いわば古東山道沿いと考えることもできるだろう。ただし、一見すると内陸部に所在する古墳といっても、河川沿いに立地する場合もある。比較的大きな河川の場合もあるが、小河川沿いに立地している場合もある。

海浜型前方後円墳の典型としては、逗子市・葉山町桜山1号墳、2号墳があげられる。特に2号墳からは西側に相模湾が広がっており、その眺望から相模湾を意識していると思われる。さらに、桜山1・2号墳がある丘陵の北側の田越川流域には逗子市持田(もつた)遺跡があり、石釧、大形管玉、管玉、勾玉などが出土している。近傍の逗子市池子遺跡群では、銅鏃、鉄鏃、内行花文鏡の破片などが出土している。いずれも桜山1・2号墳の築造時期とほぼ同時期と思われ、通常の集落遺跡では出土しない貴重なものなので、桜山1・2号墳の被葬者との関りが想定される。相模湾から東京湾や太平洋側、あるいは西方と海路でのつながりを示していると考えられよう。

同様な古墳は100m超級の前方後円墳では、関東地域で東京都港区芝丸山古墳、千葉県市原市姉崎天神山古墳、同釈迦山古墳、茨城県大洗町磯浜古墳群(日下ヶ塚古墳、車塚古墳など)があげられる。東北地域では浜通りの福島県いわき市玉山古墳、宮城県名取市雷神山古墳、仙台市遠見塚古墳などがあげられる。名取市十三塚遺跡のSK-1という土坑から、石釧が出土している。雷神山古墳の西方約1kmの地点であり、上述の桜山1・2号墳と持田遺跡との関係と同様の評価ができると思われる。5世紀から7世紀の千葉県富津市内裏塚古墳群、木更津市金鈴塚古墳なども同様であろう。

さらに、霞ヶ浦周辺は古くは海とつながっていて香取海と呼ばれていたが、茨城県行方市兜塚古墳、鹿嶋市お伊勢山古墳、美浦村愛宕山古墳なども海浜型といえよう。香取海沿岸地域は、前期から後期まで中規模の首長墓を含めて多くの海浜型前方後円墳・前方後方墳が存在する。石岡市舟塚山古墳は墳丘長186mの5世紀前葉の大型前方後円墳であり、高浜入りの海浜型前方後円墳といえよう。香取海には中世の『海夫注文』あるいは霞ヶ浦四十八津・北浦四十四ヶ津などにみられる津が存在する。これらの津と首長墓の分布をみると、「香取海を廻る主要前方後円墳は、すべて中世以降の津所在地と重なってくるのが指摘できる」と理解した(日高2015:p.87)。上述した太平洋沿岸地域の首長(墓)と同様に、水界民と港を統括する津長が海浜型前方後円墳被葬者の本質であるとしたのである。

相模湾周辺、東京湾周辺、香取海沿岸、那賀川河口、浜通り、仙台湾周辺でそれぞれの地域の最も大きな古墳として海浜型前方後円墳が存在している。一方、山梨県、群馬県や栃木県、福島県、山形県などの内陸部で巨大な古墳が造られていることも事実である。陸上交通のルート上や河川流域で古墳が造られているように思われる。例えば、茨城県の久慈川流域とした梵天山古墳や星神社古墳についても久慈川を遡っていくと福島県の矢祭町・棚倉町へとつながり、やがては阿武隈川にも接続するし、栃木県那須地域にも近くなる。川喜田二郎が述べたように、内陸水運も含めて「ターミナル・ステーション」の付近が選ばれて古墳が築造されたといえよう。

### 3. 海蝕洞穴・横穴墓の卓越した副葬品と首長

千葉県館山市大寺山洞穴から、多数の舟棺とともに副葬品の土器類、短甲、刀剣類、木製盾、鉄鏃、青銅鈴、金銅製歩揺、各種玉類などが出土している(岡本2020)。岡本東三は「古来、「海人」は漁労と航海を生業にした海辺の民である。その伝統は縄紋時代の貝塚文化とともにはじまったのであろう。一中略一海上交通や港、軍事や食料基地として、安房海人の首長はヤマト王権と特別な関係をえたのであろう。一中略一「陸」の首長層が前方後円墳をつくったのにたいし、豪華な副葬品をもちながらも五世紀前半から七世紀前半にわたる約二五〇年間、安房海人族の首長層の奥津城として洞穴墓が営まれたのである。」と総括した(岡本前掲:pp.72-73)。

山田俊輔は本州島沿岸部を中心に分布する洞穴墓を、単葬や複葬などの諸特徴から分類している(山田2018)。三浦半島や房総半島に洞穴墓が濃密に分布しているが、「様々な物質文化と多様な墓葬類型が交錯する三浦半島は、列島の南縁、東縁に連なる様々な海民集団が交流した場であったと評価できる」とし(山田前掲:p.95)、古墳時代洞穴墓は古墳を造れなかったのではなく、主体的に採用した墓制であると総括した。だからこそ、首長墓たる古墳の副葬品としても遜色ない物品が洞穴墓の被葬者に収められたのであり、首長として認識すべき人びとであったといえよう。もちろん、洞穴墓のすべての被葬者が首長ではなかったと思われる。古墳の場合は墳丘規模や墳形で首長墓かどうか判断できる場合があるものの(日高2024)、洞穴墓では未詳な部分が多い。木棺の違いなどがあるのかどうか、今後の課題である。

稲村繁は洞穴墓や舟形棺について注目するなかで、骨鏃や鹿角製品が洞穴墓だけでなく横穴墓からも出土することに注目しており、「横穴墓被葬者の一部は漁撈系集団であり、それらの横穴墓は東海以西を起源とする「外来系墳墓」の可能性が高くなる。一中略一海民系集団には、漁撈を主たる生業とする漁撈系集団と、当初から水運を生業の一部とする水運系集団が並存していた」と述べた(稲村2013:PP.40-.41)

私は、太平洋沿岸地域の横穴墓の中に、首長墓と理解すべきものがあることを指摘したことがある(日高2002)。例えば茨城県日立市赤羽横穴群B支丘1号横穴墓、福島県いわき市中田装飾横穴墓などである。前者からは奈良県斑鳩町藤ノ木古墳と同様な金銅製金具が出土している。後者の中田装飾横穴墓は、赤・白色による三角文を後室全面に施した装飾横穴墓であり、金銅製の馬具や銅鏡、大刀や挂甲

小札など豊富な副葬品が出土しており、古墳時代後期の、地域の中でトップクラスの首長墓副葬品でもおかしくない。

以上のように、海蝕洞穴のなかの首長墓、横穴墓のなかの首長墓が確実に存在している。高塚古墳に比べると墓そのもので差異を見出すのが難しいものの、それぞれの中で階層性をもっているはずであり、首長墓とそうでない墓の両者が混在していると考えられよう。卓越した副葬品を持っていない横穴墓が存在することも間違いないのであり、東京都の多摩地域で検出されている数多くの横穴墓は、そのほとんどが首長墓とはいえない墓であると考えられる。

#### 4. 多様な首長の姿と船の構造

西川修一は海浜型前方後円墳に関して、「古墳（特に前半期）は「視認性」が交通の「結節性」と有意な関係を持っている点を重視すべきである」と述べた（西川 2024：P.112）。古墳が造られる場所にどのような意義があるのか、という問いへの答えである。それは、上述したように川喜田二郎がいうところの内陸水運も含めて「ターミナル・ステーション」の付近が選ばれたということと親和性が高い。

内陸では、巨大前方後円墳や中規模前方後円墳、中小古墳などが、首長の支配領域から視認できる場所に築かれ、沿岸地域では海からみたときに視認できる場所（もちろん陸上からも）に築かれ、それは海も首長の支配領域として理解されていたのだと思われる。河川沿いに築かれた古墳も首長の支配領域から視認できる場所であり、水上交通（あるいは陸上交通）の要衝であったはずである。

海蝕洞穴や横穴墓は、高塚古墳と異なり外部からは視認しづらい場所である。そのような場所に墓を築くというのはどのような意味があるのだろうか。高塚古墳における見せびらかしという発想とは180度逆の方向性である。私は、茨城県大洗町常陸鏡塚（日下ヶ塚）古墳の被葬者について、水界民・港を統括しつつ海上交通を掌っていたと考えたことがある（日高 2002：PP.39-41）。海浜型前方後円墳を築造した首長と海蝕洞穴・横穴墓に葬られた首長とは、どのような質的な違いがあったのか、それともなかったのか。西川修一は「海に面した領域に生活し、海産物生業や物流へと多様な生業に従事していた状態から、「舟の操舵に係る」専門集団へ再編されていった者もいたのではないか」と述べた（西川 2015：P.128）。

海蝕洞穴で、5世紀以降に首長墓が築かれるように変化したのかもしれない。それまで存在していなかった新たな首長が誕生したことで、高塚古墳ではなく海蝕洞穴へと埋葬をおこなうに至ったのだろうか。その際、高塚古墳という従来の首長墓ではなく、洞穴墓に自らのアイデンティティーを示そうとしたのではないか。見せびらかし、すなわち外向きである高塚古墳に対して、洞穴墓や横穴墓は内向きと認識できるかもしれない。自らが所属する集団に対して向けられた墓制といえるのではなかろうか。経済的基盤あるいは労働力という面からは、高塚古墳と洞穴墓・横穴墓では関わる人びとの数が圧倒的に少ないかもしれないが、そのなかでも首長として水界民集団を統括していた人が被葬者だったのではなかろうか。

ここまで海上・水上交通、水界民、港などと首長との関わりを論じてきたが、船の構造について述べておきたい。縄文時代以来の船の構造については、丸木船→準構造船→構造船という変遷が考えられた。飛鳥時代以降の遣唐使船には、中国形船建造技術が導入されたものの、遣唐使の廃止とともにその技術は断絶したとされ、その後の平安時代には構造船が存在していたというものであった。しかし、出土した木造船の検討から、古墳時代にはオモキ造りの船が存在していたことが分かってきている。このオモキ造りの船は丸木船の船底を割き間にチョウと呼ばれる板材を挟み込むというものであり、それは構造船と呼んでも差し支えないのではないかと思われる(日高編 2024)。また、一瀬和夫は「刳船(細い舷側板縫合船を含む)から上部の構造化の中途段階に二体成形船、その大型化の限界性からくる機能分化、そして上部と船底部の一体成形船へといった流れを描くことができる」としたが(一瀬 2008 : p.222)、この二種が船底構造に変化をもたらしているのかどうかを今後検討していかなければならない。さらに、オモキ造りの船が外洋船としては強度不足ではないかとの意見もあるので、今後の課題は大きい5世紀前半の構造変化は極めて重要である。

## おわりに

ここまで述べてきたように、海浜型前方後円墳が水界民と港を統括する首長(津長)の墓であることはお分かりいただけたと思う。洞穴墓・横穴墓のなかにも首長墓があり、水界民集団を統括していたと思われる。今後は様々な墓制を相互に比較検討していくことが求められよう。

## 【引用文献】

- 一瀬和夫 2008 「古墳時代における木造船の諸類型」『古代学研究』180 pp.215-223  
稲村繁 2013 「海民と洞窟葬」『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』pp.32-42 同成  
岡本東三 2020 『海上世界のコスモロジー 大寺山洞穴の舟葬墓』新泉社  
かながわ考古学財団編 2015 『海浜型前方後円墳の時代』同成社  
川喜田二郎 1980 「生態学的日本史臆説一特に水界民の提唱一」『歴史的文化像』pp.109-145 頁 新泉社  
西川修一 2015 「洞穴遺跡にみる海洋民の様相」『海浜型前方後円墳の時代』pp.110-138 同成社  
西川修一 2024 「海洋民論」『日本考古学の論点 下』pp.107-114 雄山閣  
日高慎 2001 「東北北部・北海道地域における古墳時代文化の受容に関する一考察」『海と考古学』4 pp.1-22  
日高慎 2002 「水界民と港を統括する首長」『専修考古学』9 pp.31-45  
日高慎 2015 「「香取海」沿岸」『海浜型前方後円墳の時代』pp.76-89 同成社  
日高慎 2024 「古墳時代首長墓の基準について」『日本考古学の論点 下』pp.27-34 雄山閣  
日高慎編 2024 『古墳時代の交通と流通』ニューサイエンス社  
山田俊輔 2018 「古墳時代洞穴墓葬の類型」『考古学研究』64-4 pp.82-101

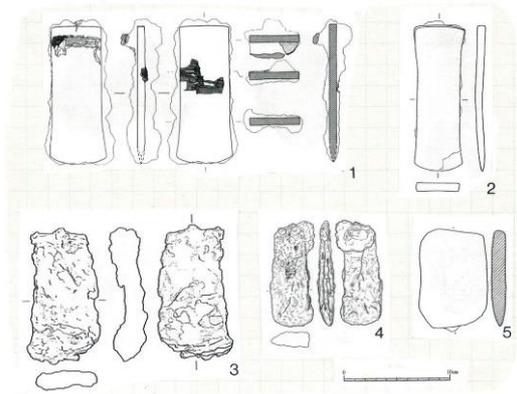


図1 短冊形鉄斧

1. 大安場1号墳 2. 西屋敷1号墳 3. 寒川Ⅱ遺跡4号土坑墓  
4. 大川遺跡96号土坑墓 5. フゴッペ洞窟

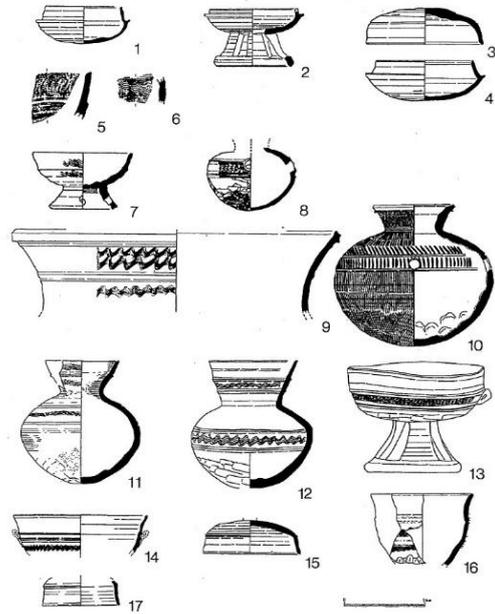


図2 初期須恵器

1. 宮崎遺跡SK04 2. オホン清水遺跡1号住居 3・4. 田久保下遺跡SK308 5・6. 仁沢Ⅱ遺跡ⅢC区 7. 高谷野原遺跡 8. 今泉遺跡6号住居 9. 膳生遺跡G-17溝 10. 大船院院跡遺跡地  
11. 三日市遺跡 12・13. 森ヶ沢遺跡 14. 森ヶ沢遺跡7・8号土坑墓 15. 森ヶ沢遺跡15号土坑墓  
16. 柏木B遺跡 第I地点 17. 上郷塚3遺跡 5・6のみ2分の1

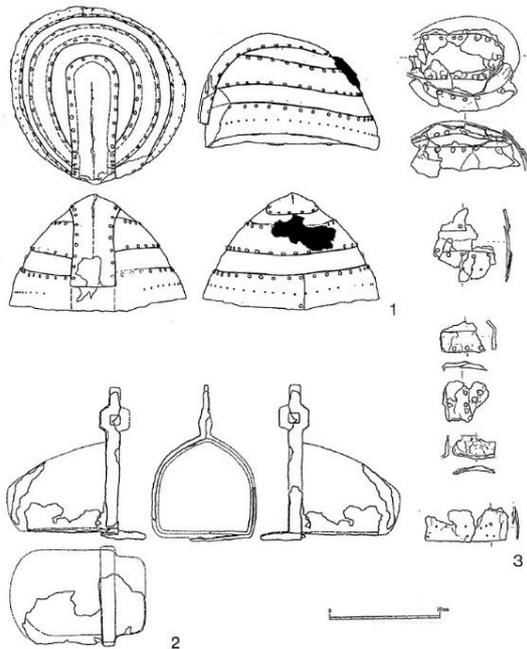


図3 北上川流域の特異な遺物

1. 上田蝦夷森1号墳 2. 藤沢秋森古墳群 3. 五松山洞窟遺跡

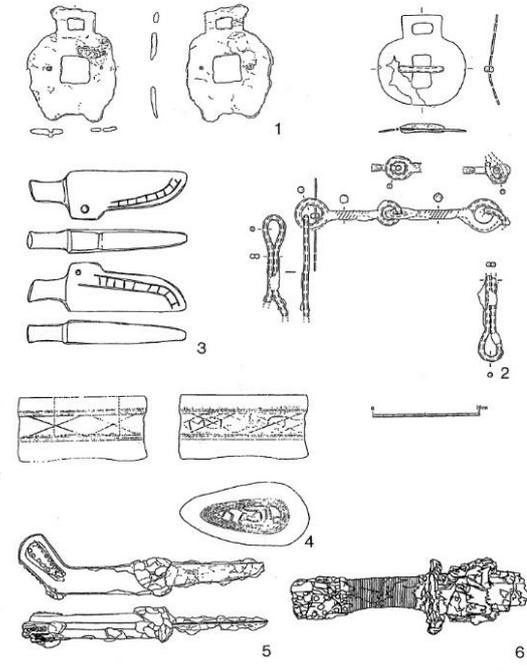
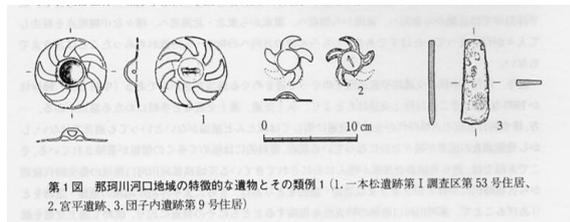


図4 北海道における特徴的な古墳時代文化の遺物ととの類別

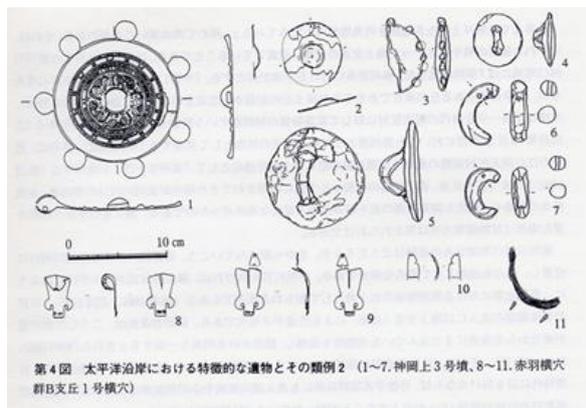
1. 大川遺跡96号土坑墓出土鉄製鏡板 2. 宮ノ内1号墳出土鉄製鏡板 3. 紅葉山51号遺跡出土石製刀子 4. 上泊遺跡鹿角製鞆瓦金具(縮尺不同) 5. 秋田県田久保下遺跡SK308出土鉄製刀子 6. 上島松遺跡出土鉄製円頭(方頭)大刀

すべて日高2001より

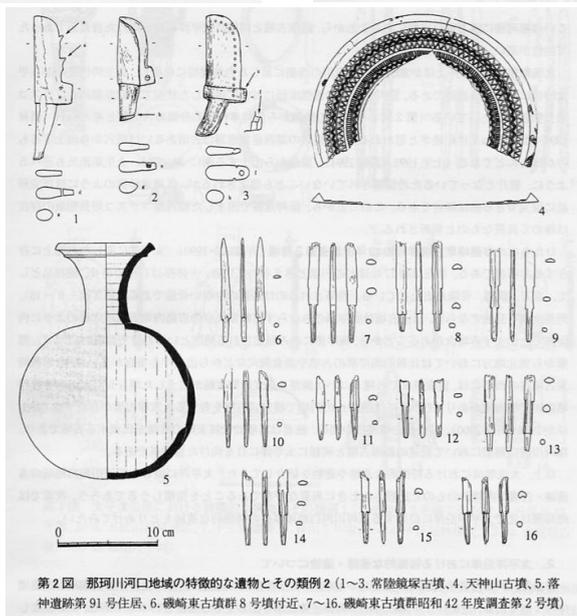
◆第3講◆ 海上・水上交通と海浜型前方後円墳・洞穴遺跡



第1図 那珂川河口地域の特徴的な遺物とその類例1 (1.一本松遺跡第1調査区第53号住居、2.富平遺跡、3.団子内遺跡第9号住居)



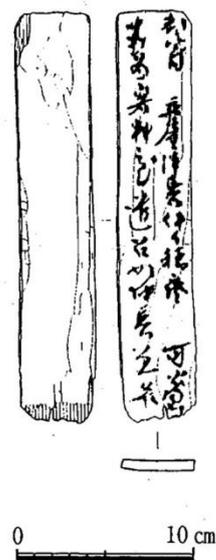
第4図 太平洋沿岸における特徴的な遺物とその類例2 (1~7.神岡上3号墳、8~11.赤羽横穴群B支丘1号横穴)



第2図 那珂川河口地域の特徴的な遺物とその類例2 (1~3.常陸鏡塚古墳、4.天神山古墳、5.落神遺跡第91号住居、6.磯崎東古墳群8号墳付近、7~16.磯崎東古墳群昭和42年度調査第2号墳)



第3図 太平洋沿岸における特徴的な遺物とその類例1 (1.伏岩里3号墳7号石室、2.丹後平15号墳、3~6.五松山洞窟遺跡、7.十三塚遺跡、8.作山5号墳、9~14.中田裝飾横穴、15-16.金冠塚古墳) (15-16は縮尺不同)



すべて日高2002より



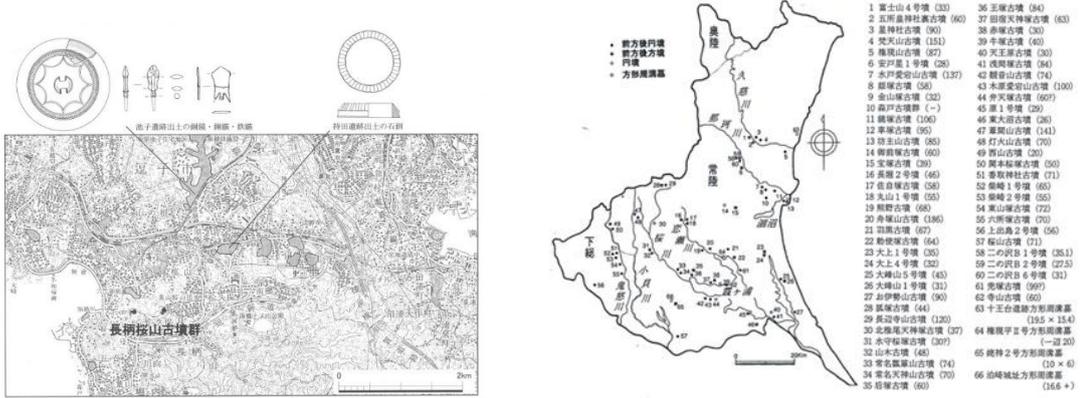
分類	東夷型西岸	東夷型東岸	西夷型西岸	大平洋沿岸	中部山岳部	中部内陸部	外縁内陸部
1					神奈川・埼玉 群内陸部 (筑山215)	千葉内陸部 神奈川群内陸部 (筑山215)	外縁内陸部 筑山(191)
2					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
3					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
3-4					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
4					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
4-5					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
5					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
6					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)
6-7					筑山(215)	筑山(215)	筑山(191)

分類	名称	所在地	特徴
1	...	...	...
2	...	...	...
3	...	...	...
4	...	...	...
5	...	...	...
6	...	...	...
7	...	...	...
8	...	...	...
9	...	...	...
10	...	...	...



すべて2013年11月16日、公益財団法人かながわ考古学財団主催のシンポジウム「海浜型前方後円墳の時代」の柏木善治作成資料より

◆第3講◆ 海上・水上交通と海浜型前方後円墳・洞穴遺跡



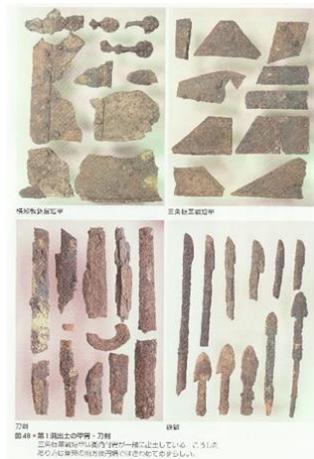
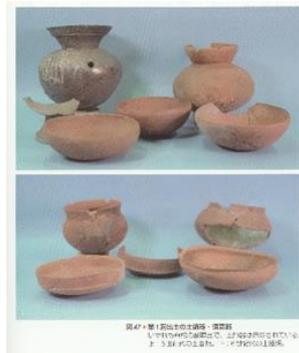
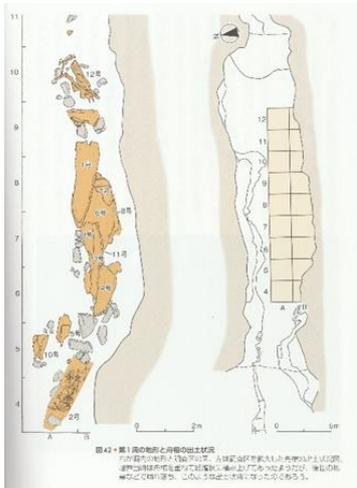
逗子市教育委員会2012『国指定史跡長柄桜山古墳群  
1号墳発掘調査報告書』より

日高2015より



小出博 1975『利根川と淀川』中公新書より

網野善彦 1983「海民の社会と歴史2 霞ヶ浦・北浦」『社会史研究』2より



大寺山洞穴遺跡

岡本東三 2020より



図49 ● 第1洞出土の鈴  
銅製鈴も関東ではめずらしく、朝鮮半島製のものか、横別板鉄造短甲にともなうものであろう。



図50 ● 第1洞出土の木製函  
中央部に菱形の窪み彫りを施し、その左右には細かな刺繍糸をかざる多数の針穴があいている漆棺片断。



図51 ● 金銅製歩揺  
歩揺にとり付ける一対の穴がある。冠か沓の一部。

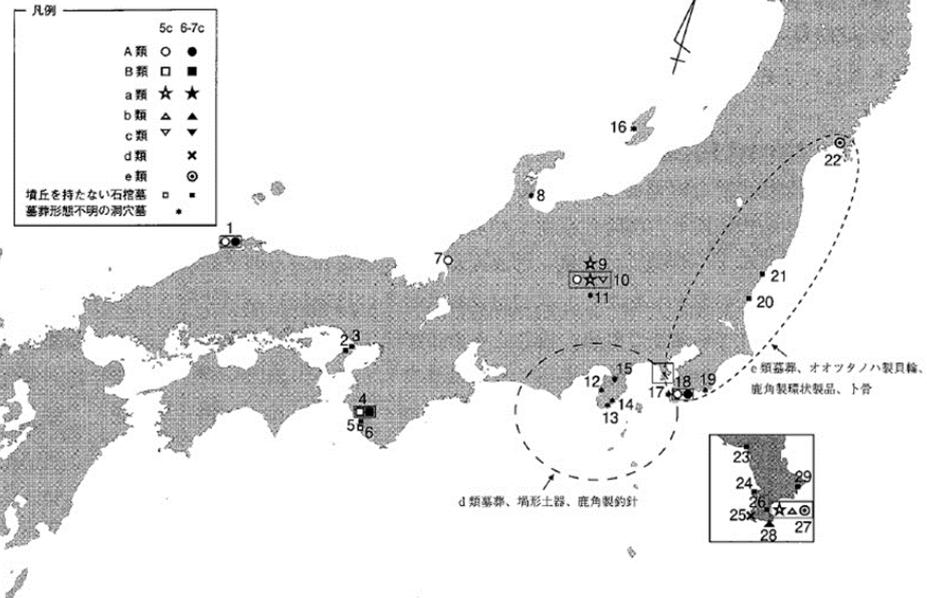


図52 ● 第1洞出土の玉類  
ガラス玉・丸玉・管玉・勾玉などがあり、上から2段目中央の六角切子玉は朝鮮半島製。

大寺山洞穴遺跡

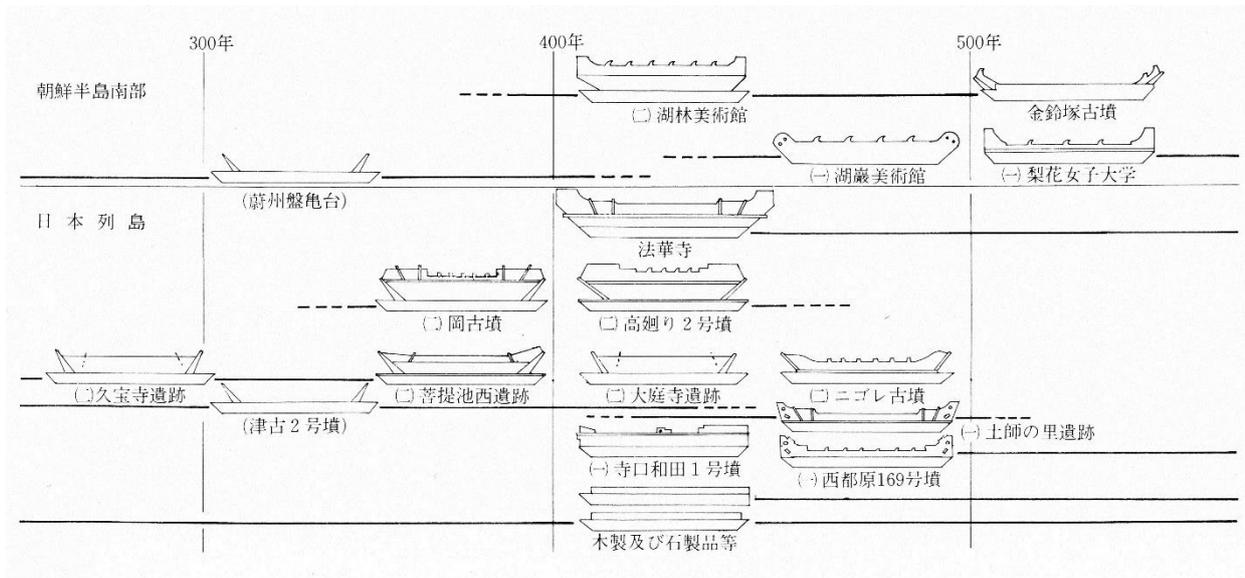
岡本東三 2020 より

1. 猪目洞窟 2. 富高遺跡 3. 貴船神社遺跡 4. 磯間岩陰 5. 新庄遺跡 6. 鷓ノ谷古墳 7. 厨1号洞穴
8. 大境洞窟 9. 岩谷堂洞窟 10. 烏羽山洞窟 11. 古岩窪岩窟 12. 炭ケ口岩陰 13. 了仙寺洞穴 14. 波来洞穴
15. 笠石山洞窟 16. 浜端洞穴 17. 鉦切洞穴 18. 大寺山洞穴 19. 本寿寺洞穴 20. 磯崎東古墳群
21. 河原子古墳群 22. 五松山河窟 23. 長谷小路周辺遺跡 24. 長井佃嵐遺跡 25. 海外1号洞穴
26. 勝谷砂丘遺跡 27. 雨崎洞穴 28. 間口A洞穴 29. 八幡神社遺跡

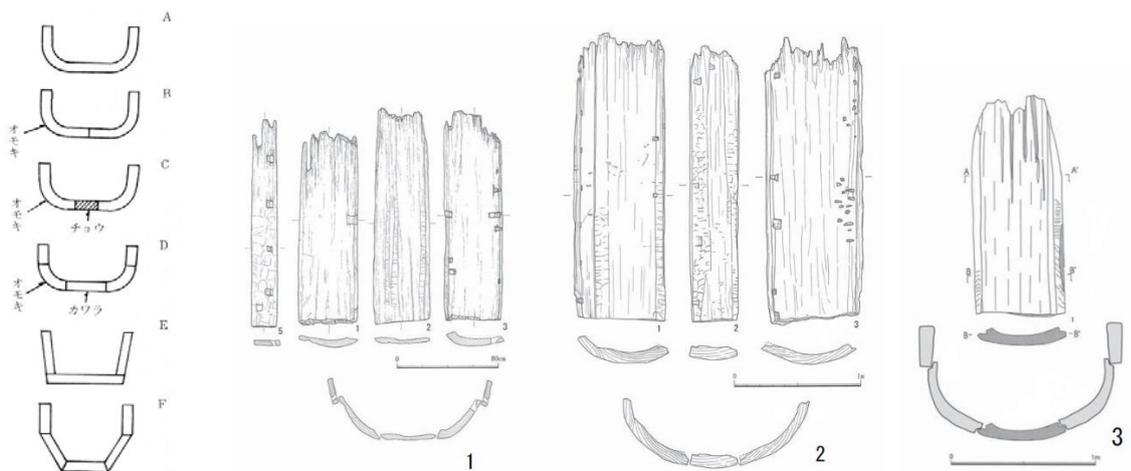


山田俊輔 2018 より

◆第3講◆ 海上・水上交通と海浜型前方後円墳・洞穴遺跡

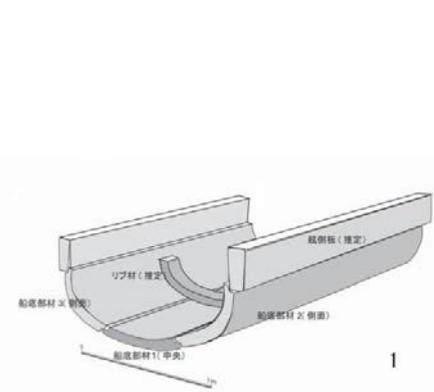


一瀬和夫による大型船の変遷

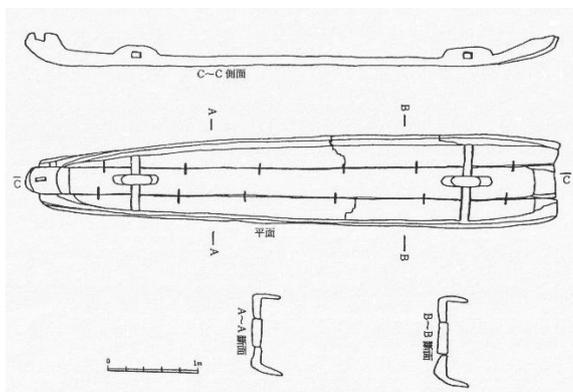


桜田勝徳による船の構造変遷

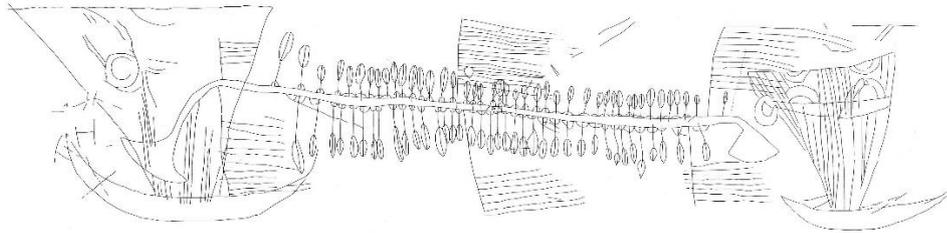
横田洋三による葦屋北遺跡と讃良条里遺跡の木造船構造復元案



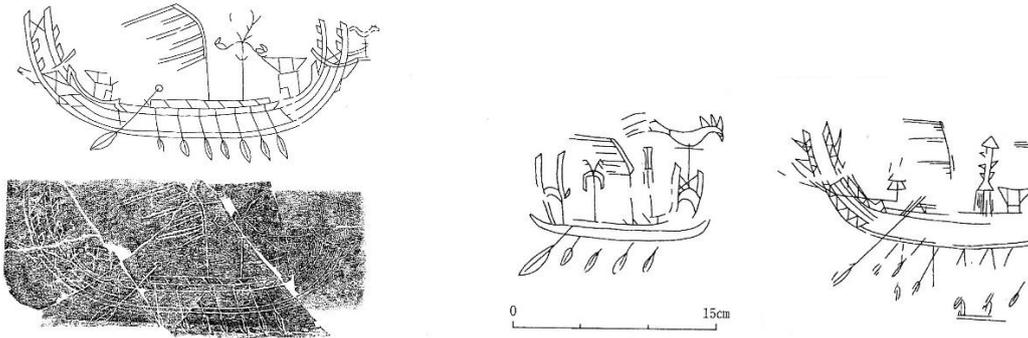
横田洋三の組み合わせ式船(構造船)復元



韓国慶州市雁鴨池の木造船



大垣市荒尾南遺跡の壺に描かれた船



東殿塚古墳出土埴輪に描かれた船 ここまで日高編 2024 に引用文献を提示

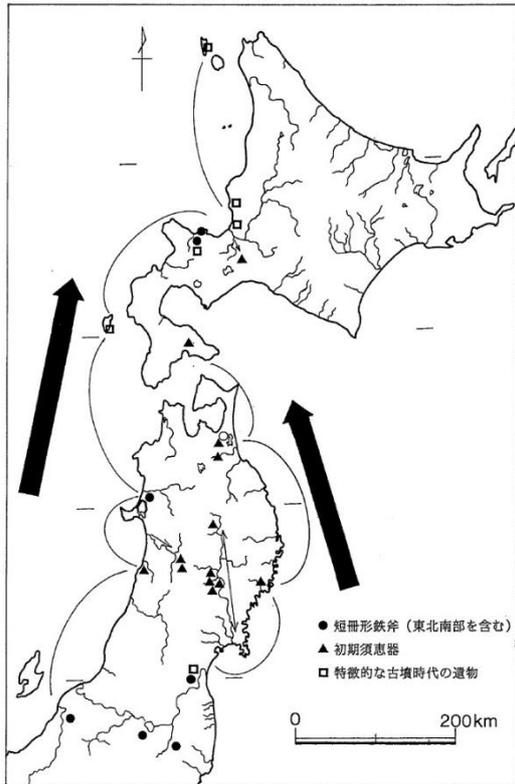
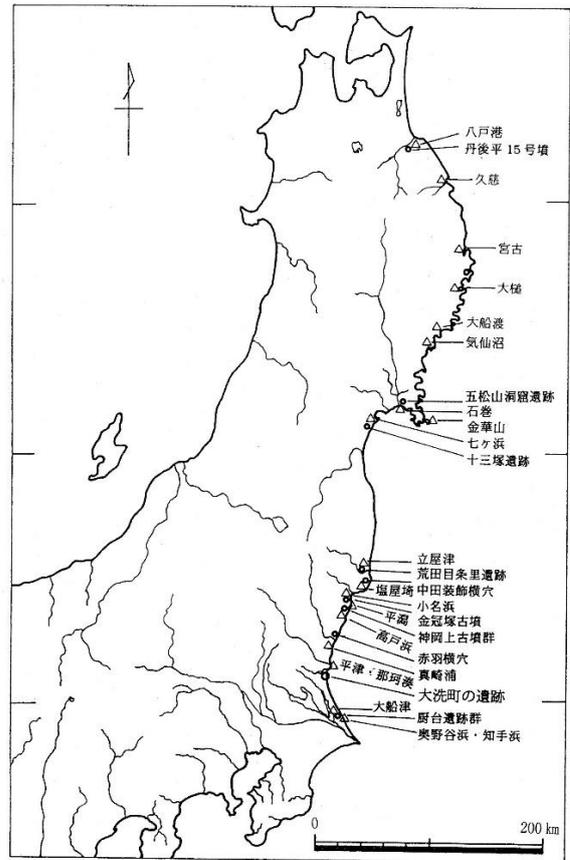


図5 東北部・北海道地域への古墳時代文化の流入ルート  
○は出土が伝えられるもの



太平洋沿岸の津と遺跡 日高 2002 より

日高 2001 より

## 蒙古襲来と鎌倉幕府

國學院大學 教授 池田 榮史

### 1 蒙古襲来とは？

鎌倉時代の日本にユーラシア大陸の大半を支配下に収めたモンゴル族の人々が建てた大元（略して元）が二度にわたる侵攻を試みた。これを日本史ではモンゴル襲来（かつては蒙古襲来、あるいは元寇）と呼ぶ。1274（文永11）年と1281（弘安4）年のことであり、それぞれの年号をとって、文永の役、弘安の役とする。

文永の役の際、モンゴル軍は博多湾に押し寄せ、西端の今津海岸に上陸した後、東へ進んで鎌倉幕府軍と戦いながら博多の街へ至り、周辺を焼き払って撤退した。鎌倉幕府軍にとってモンゴル軍の撤退は予想しないものであったらしく、鎌倉時代に成立したとされる『八幡愚童訓』には「こは何ぞ」と驚きを表した言葉を記している。しかし、思いがけないほど迅速なモンゴル軍の撤退は鎌倉幕府側に再来の可能性を痛感させ、博多湾一帯に石築地（元寇防塁）を設けるなどの防御策を急がせることとなった。

この元寇防塁は二度目の弘安の役の際、大きく役立つことになる。二度目の弘安の役に動員されたモンゴル軍は支配下にあった朝鮮半島（韓半島）の高麗南部地域から進発した東路軍と中国江南地域から進発した江南軍で編制され、両軍は5月中に壱岐で合流して博多湾へ侵攻する計画であった。しかし、司令官の病気交替などの影響もあり、江南軍の進発は6月末から7月にずれ込むことになった。一方、予定通り進発した東路軍は壱岐を經由して単独で博多湾へ至ったものの、石築地を築いて防御線を整えていた鎌倉幕府軍の抗戦に遭い、文永の役の際とは異なって博多へ侵攻することができなかった。このため、東路軍は博多湾口に位置する志賀島周辺に船舶を係留し、博多への侵攻機会を窺ったが、鎌倉幕府軍の攻勢を受け、再び壱岐へ戻って、江南軍を待たざるを得なくなった。

7月下旬に至り、日本へ来着した江南軍は東路軍との合流場所を平戸島周辺に変更し、その後、東へ進んで伊万里湾に移動した閏7月1日未明、暴風雨にあって壊滅的な被害を受けた。このため、モンゴル軍中枢は協議の上、沈没を免れた船舶に乗り、多くの兵員を置き去りにして撤退の途についた。残された兵員は鎌倉幕府軍の掃討を受け、2万人余りが捕虜となった。捕虜は博多に移送後、旧南宋人は下人（奴隸）化されたが、そのほかのモンゴル人、高麗人、旧南宋人以外の漢人は斬首されたという。

二度の日本侵攻が不首尾に終わったことから、モンゴル皇帝フビライは三度目の侵攻を計画したが実現には至らなかった。これに対し、鎌倉幕府側も三度目のモンゴル侵攻に備えた防備体制を

維持しなければならなかったことが過剰負担となり、鎌倉幕府崩壊の遠因の1つとなった。

## 2 モンゴル襲来までの動き－高麗と南宋－

モンゴル族の人々が国家形成を成し遂げたのは1206年である。モンゴル族キヤト氏族に生まれたテムジンはモンゴル諸氏族だけでなく、周辺の他民族を統合してイフ・モンゴル・ウルス（大モンゴル国）を建国し、自らはカン（皇帝）位（在位期間～1227年）についてチンギス・カンとなった。チンギス・カンは大モンゴル国周辺地域へ侵攻を続け、帝国の拡大を図った。この方針は第2代皇帝オコデイ（在位期間1229～1241年）、第3代皇帝グユク（在位期間1246～1248年）、第4代皇帝モンケ（在位期間1251～1259年）に引き継がれた。

アジア地域では1211～15年にかけて、現在の中国東北部を領土とした女真族（＝満洲族）の国家である金へ侵攻し、支配下に収めた。その際、金の領土内にいた契丹族（946～1125の間に中国東北部を版図とした遼を建国した民族）の一部が朝鮮半島に侵入したことから、大モンゴル国は高麗と連携してこれを制圧した。これを契機として高麗は大モンゴル国の朝貢国となり、大モンゴル国は高麗に対して頻繁に貢物を要求するようになった。高麗はその対応に苦慮するが、1225年にチンギス・カンの末弟であるテムゲ・オッチギンの使者が高麗国内で不慮死を遂げたことをきっかけとして、1231年以降使者殺害の罪状を問うことを名目とした大モンゴル国による高麗への侵攻が開始された。モンゴル軍は高麗の王都である開京（現在の開城）を攻略したため、高麗は和議を結んで国内への大モンゴル国ダルガチ（統治官）配置を認めた。しかし、モンゴル軍が撤退した1232年、高麗の実質的政権を担っていた武臣執政の崔瑀（在職期間1219～1249年）は講和を破棄し、高麗国内に配置されたダルガチを殺害するとともに、王宮を開京から江華島へ移してモンゴルへの抗戦を図った。

これに対し、1234年に金を完全に滅ぼした第2代皇帝オコデイは高麗への再侵攻を本格化した。高麗では大モンゴル国との間の再講和を求める動きが起こったものの、江華島に籠る武臣政権は抗戦をやめなかったことから、モンゴル軍は高麗国内の焼土化作戦を進め、高麗の国力は次第に低減した。1251年第4代皇帝グユクが即位すると、高麗国王に対して江華島から開京へ王宮を戻すこと（出陸）と、国王のモンゴル宮廷への出頭（親朝）を条件とした講和を提案した。高麗は1254年に至って講和を受け入れ、第二王子を人質としてモンゴルに送ったが、武臣を中心とする高麗政権中枢の人々は江華島を動こうとしなかった。この時、高麗政権内部には大モンゴル国との文官を中心とする講和派と武臣執政を中心とする徹底抗戦派が生じており、1257年には長らく執政の地位を相続していた崔氏が誅殺され、講和派が主導権を掌握することとなった。

1259年高麗国王高宗は南宋攻略戦のため現在の四川省へ出陣していたモンケの下に高麗の太子である僖を派遣した。しかし、モンケが陣没したことから、僖は自らの本拠地であった開平府（現在の内モンゴル自治区シリントウ盟正藍旗金蓮川）に帰陣中の皇弟フビライに拝謁した。翌年（1260年）フビライは開平府でクリルタイ（皇位継承のための部族会議）を開き、皇帝となって、国号を大元（以

下、元と表記)とした。なお、高麗では国王高宗が死去したことが伝わり、フビライは僂を帰国させた。帰国した僂は自らに代わって太子をフビライの下に入朝させたことにより、フビライは僂を高麗国王元宗として冊封した。元宗は親元的政策を進めたため、高麗国内の対モンゴル徹底抗戦派の不満が高まり、1268年に元宗を廃して、王弟を擁立する反乱が起こった。これに対して、フビライは入朝していた元宗の太子諶にモンゴル兵を付して帰国させ、反乱を鎮圧するとともに元宗を復位させた。1270年モンゴル徹底抗戦派であった最後の武臣執政である林惟茂が宮廷クーデターで殺害され、高麗では元宗親政による親モンゴルの国家運営が行われることとなった。

しかし、これに反発した武臣たちの中の三別抄(本来は王宮と王族の先祖の廟堂を警護する軍人部隊であったが、武臣政権の私兵化していた)は1271年江華島に残っていた王族と官人の家族を率いて、現在の全羅南道珍島龍藏山城に移動し、ここを拠点として別の国王を立て、モンゴルへの抗戦を続けた。元宗は元軍の援兵を受けて、珍島を攻略したが、三別抄の一部はさらに南の済州島へ移動して抗戦を続けたものの、1273年高麗・モンゴル軍の攻撃に遭って壊滅した。

なお、第5代皇帝フビライが即位するためのクリルタイを開いた1260年、大モンゴル国の王都であったカラコルム王宮ではフビライの末弟アリク・ブケは自らも皇帝となるためのクリルタイを開いて即位し、大モンゴル国には二人の皇帝が並び立つ分裂状態となった。しかし、1264年にアリク・ブケはフビライに降伏し、フビライが正式な第5代皇帝となった。その後、フビライは南宋攻略を本格化させ、1276年には南宋の王都である臨安(現在の浙江省杭州市)を陥落させた。この際、南宋の一部遺臣が皇帝の王子を連れて海上に逃れ、南宋の存続を図ろうとしたが、1279年に現在の広東省を流れる潭江河口の崖山島に追い詰められて滅亡した。これにより、フビライの攻略目標は日本やインドシナ半島へと向かうことになる。

### 3 日本へのモンゴル襲来の要因

歴代モンゴル皇帝の主な軍事行動の対象は金や南宋であった。1234年に金を滅ぼした後、大モンゴル国は南宋としばらく共存を図る方針であったが、次第に攻略戦へと変化する。1251年第4代皇帝モンケが即位すると、皇弟であったフビライはチベットを經由して、現在の雲南省にあった大理国を攻略する。これにより、大モンゴル国は中国江南地域を版図とする南宋の北辺・西辺・南辺を支配下に収めた。

これを受け、1260年に第5代皇帝となったフビライは高麗との連携を強化し、南宋との交易関係を持つ日本を対南宋包囲網の中に取り組みことを模索する。1265年高麗人趙彝がフビライに日本との通交を進言すると、フビライは翌1266年に国信使兵部侍郎黒的(ヒズル)と副使礼部侍郎殷弘を高麗経由で日本へ派遣することとした。二人は巨済島まで行ったものの、渡海に恐れをなし引き返した。そこで、フビライは1267年に黒的、殷弘を高麗に再派遣して、日本との仲介を高麗国王元宗に命じた。元宗は元の国書と高麗国書を側近の起居舎人潘布に持たせ、日本へ派遣したが、日本側では返牒を拒否した。このため、フビライは1268年に黒的、殷弘を高麗に再々派遣し、元宗に

対して日本への渡海援助を命じた。黒的、殷弘および高麗使者は1269年に対馬まで渡り、島人2人(塔二郎・弥二郎)を捕縛して高麗へ連行し、フビライの下に送った。対馬人2人を引見したフビライは二人の送還と国書の送達を元宗に指示し、元宗は金有成に命じて対馬人と元国書(中書省牒)と高麗国書を日本へ送達した。しかし、翌1270年鎌倉幕府は国書への返書を拒否し、高麗使者を帰した。これを受けたフビライは1271年に最終通告とも言える国書を国信使秘書監趙良弼(女真人)に託し、高麗経由で日本へ派遣した。国書には11月までに返書がない場合、兵船を準備し、軍事行動に訴えることが記載されていたが、やはり鎌倉幕府は国書への返書を拒否し、国信使は翌1272年に虚しく帰国した。

このような経過により、元軍の日本侵攻は必至の状況となったが、高麗では1271～73年にかけて、三別抄の反乱が起り、日本への侵攻を図れる状況になかった。そこで、三別抄反乱の鎮圧後、フビライは元軍と高麗軍を編成し、1274年10月に日本への侵攻を命じた。これが文永の役である。

文永の役後の1275年、フビライはあらためて日本招諭使杜世忠(蒙人)、副使何文著(唐人)、討議官・書状官(ウイグル人)を日本へ派遣したが、鎌倉幕府は鎌倉龍の口で斬首した。また、1279年に南宋を滅ぼしたフビライは南宋の降将范文虎に日本遠征を諮問し、范文虎はこれに応えて日本招諭使を派遣したが、博多で斬首された。なお、この間に日本招諭使杜世忠らが鎌倉幕府によって斬首に処せられたことが伝わったことから、フビライは1281年に高麗を進発した兵員約4万人(軍船900艘)と旧南宋の広州湾から進発した兵員旧南宋降伏部隊を中心とする兵員約10万人(軍船3500艘)による日本侵攻(弘安の役)を発令することとなる。

#### 4 鎌倉幕府の対応

1269年に潘布によってもたらされた元皇帝フビライと高麗国王元宗からの国書について、日本側では博多にいた鎌倉幕府御家人少弐(武藤)資能が受け取り、鎌倉へ送達した。鎌倉幕府ではこれを朝廷に回送した。朝廷では後嵯峨上皇の下で評定を行ったが、返牒は行わなかった。続く1271年の元国書と高麗国書に対して、朝廷は返書(太政官牒状)草案を作成したが、鎌倉幕府の拒否により返書には至らなかった。

この段階で、鎌倉幕府は元軍の日本侵攻を必至のことと捉え、9月には九州に所領を持つ御家人への下向を命ずるとともに、豊後国守護大友頼泰、筑前・筑後国守護少弐(武藤)資能に筑前・肥前の要害に対する警固を指令した。このような対外的危機感が強まる中、1272年2月に鎌倉幕府の内紛である二月騒動が起こる。これを契機として、筑後国守護は大友頼泰、肥後国守護は安達泰盛が命じられ、元軍襲来への鎌倉幕府による対策の強化が図られた。

1274年5月の文永の役の際、九州各国の守護に率いられた御家人は元軍との戦闘に参加したが、鎌倉幕府軍劣勢のうちに元軍が退却して、戦闘終了となった。この経験を踏まえ、鎌倉幕府では西国諸国に「本所領家一円地の住人」すなわち鎌倉幕府の支配が及ばない荘園の荘民を含めて、守護の下にモンゴル襲来に際しての軍役に就くことを命令した。また、1275年には「異国警固番役」を

制定して、九州各国の御家人に四季ごとに交代する博多警固を命じた。また、九州各国に博多湾一帯の海岸部に石築地（元寇防塁）を築くことを命じ、それぞれの国ごとの分担が割り当てられた石築地構築が急速に進められた。

1281年6月の弘安の役では元寇防塁を含む鎌倉幕府側の戦闘準備が効力を発揮し、先行して博多湾に侵攻した高麗からの東路軍の博多湾上陸を阻止した。東路軍は一時的に志賀島周辺に兵站を置いて、博多侵攻を試みたが果たせず、東路軍は本来の合流地点であった壱岐へ撤退せざるを得なかった。その結果、進発が遅れた江南軍と漸く合流することとなった伊万里湾において、閏7月1日未明暴風雨に遭い、ほぼ壊滅状態になった。遭難を免れた元軍に対して鎌倉幕府軍は掃討戦を仕懸けることになる。

なお、モンゴル襲来は国外からの侵攻に対する防衛戦であったことから、戦闘によって得られた新たな領地や資産はなく、鎌倉幕府は戦闘に参加した御家人たちへの恩賞対策に窮することになった。さらに異国警固番役や石築地の維持修復などの負担を負った西国だけでなく、全国的に窮乏し始めた御家人たちへの対策を講じなければならない状況に追い込まれた。

そのような中、鎌倉幕府内では得宗家とその被官である御内人が台頭し、鎌倉幕府を支えてきた有力御家人の間の軋轢が高まった。1284年に執権北条時宗が死去し、嫡子貞時が跡を継ぐと、その緊張は一気に高まり、1285年11月霜月騒動が起こった。霜月騒動では開幕以来の有力御家人であった安達一族やモンゴル襲来を戦った少弐（武藤）景資らが誅殺され、得宗家の内管領で貞時の乳母父である平頼綱の権力が増大した。しかし、1293年執権貞時は平頼綱（禅門）を討ち、貞時による得宗専制体制が確立した。この際、霜月騒動で没落した安達一族などの復権が認められることとなったが、鎌倉幕府の衰退はその後も静かに進行することとなる。

## ◆ 第5講 ◆

考古学ゼミナール 海から探る、いにしえのかがわ  
2024（令和6）年11月2日（土）

# 縄文の海となりわい

明治大学文学部 教授 阿部 芳郎

第5講については、未発表の内容を含んでいるため、掲載を控えさせていただきます。



令和6年度 考古学ゼミナール

## 海から探る、いにしえのかながわ

編集・発行

神奈川県教育委員会 教育局生涯学習部 文化遺産課 中村町駐在事務所  
(神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

電話番号：045-252-8661（平日9時-17時）

F a x : 045-252-8663